

# 身体性の社会学の必要性と可能性

井上 芳保

## 要 旨

本稿はディスコミュニケーションの問題を糸口に吉田社会システム論の問題点に言及するものである。吉田は発信・送信・受信と要素別にディスコミュニケーションの原因を捉える立場をとるが、ペイトソンらのダブルバインド論では分裂病を或る情緒的関係性の中で発生する現象と捉える。吉田は暗黙のうちにホメオスタシスを好ましい状態と捉えているが、家族ホメオスタシスとはポジティヴフィードバックがネガティヴフィードバックによって固定される悪循環である。「主体性」を超えたシステムの潜在性によって生ずるところにディスコミュニケーション問題の本質があるが、近代個人主義的人間観を暗黙のうちに前提とする吉田の方法では十分にそれを扱えない。吉田社会システム論は均衡原理（可能性）だけでなく生命現象以降に固有の許容原理（必要性）を導入した点で独創的だが、非許容均衡状態の扱いをみると均衡原理（可能性）優位の発想をなお残している。「主体性」を超える許容原理に関わる問題を視野に収めた社会システム論や社会情報学の構築には、ダブルバインド状況などの「意図せざる結果」論を含み、生活世界の深層を射程に入れた「身体性の社会学」が必要である。

\*キーワード：関係の病としての分裂病、悪循環、ダブルバインド、ポジティヴフィードバックとネガティヴフィードバック、ホメオスタシス、身体性、生活世界の深層

## \* 目次

- 1. はじめに
- 2. 社会的ディスコミュニケーションの分析
  - をめぐって
  - (1) 発信・送信・受信過程という分類
  - (2) 関係の病としての分裂病
  - (3) 近代家族ゆえのディスコミュニケーション
- 3. 「意図せざる結果」論への着目の必要性と可能性
  - (1) 過剰な形式志向が意味するもの
- (2) 吉田社会システム論とリアルな社会変動
- (3) 病理としての家族ホメオスタシス
- (4) 吉田社会システム論の均衡論的性格
- 4. 生活世界の深層としての身体性と受苦性
  - (1) 悪循環突破の可能性と身体の下層部分
  - (2) 生活世界の深層とシステム論

## 1. はじめに

この度、吉田先生にはせっかく遠くから来ていただきましたので、お迎えする側としてそのお仕事についてよく勉強させていただかねばと思っておりました。と申しましても何しろ先生のお仕事は量的に膨大であり、全てをカバーするというわけにはとても参りませんでした。今回、私にできたのは、1990年に相次いで出版された『自己組織性の情報科学』『情報と自己組織性の理論』という二点の御著作にできる範囲で眼を通した程度です。

もちろん、私は社会学の理論に関心を持つ一人として学生の頃から吉田先生の論文は気にならぬわけではなく、その精力的なお仕事ぶりには常々敬服しておりました。一時期の私は吉田社会学のファンだったといえる程です。社会現象を扱うにあたり、物理現象、生命現象など自然科学的領域をも視野に収めて把握していく総合性、生じうるあらゆる可能性に漏れなく言及してしまう網羅性、そして独自の概念を駆使しつつ何でも御自分の理論の中に組み入れて整理してしまう体系性志向の強靭さといった諸点は私にとって特に印象的でした。

今回、コメントーターを引き受けてしまったことで実は久々に吉田先生の論文に接することとなったのですが、今述べたような印象は以前とあまり変わりません。「吉田先生の世界」とでも呼ぶべきものの持つ魅力には改めて敬意を表します。ただ、以前に読んだときは見事なお仕事ぶりに感嘆するばかりだったのが、ブランクを経て改めて今回読ませていただき、そのお仕事の中の、今の私の問題関心からするとかなり根底的なところから違和感を感じる部分が私の中で鮮明になって参ったことがあります。もちろん、相変わらず見事だと感嘆してしまう部分も少なくはないのですが、せっかくの機会ですので今回

は敢えてその違和感の部分を中心にしゃべらせていただきたいと思います。

## 2. 社会的ディスコミュニケーションの分析をめぐって

### (1) 発信・送信・受信過程という分類

さて、お配りしたレジュメには「吉田社会システム論における「社会的ディスコミュニケーション」問題の処理をめぐるいくつかの疑問——「意図せざる結果」論の必要性と可能性および／または社会進化論的社会情報学の必要性と不可能性」との表題をつけましたが、社会情報学方面での私の最近の問題関心は、ディスコミュニケーションにおかれています。これはつまり、コミュニケーションがうまくいかない状況というものを扱う問題領域です。私自身の生活を振り返ってみると他者とうまくコミュニケーションできないことが多いという切実な問題があります。うまくやろうとすればするほど益々うまくいかなくなってしまうという悪夢的状況に自分がはまってしまっているのではないかというようなことがしばしばあります。もちろん、そうなってしまうのは私の責任による部分がけっして小さくはないのですが、そのこととは別に何か自分の意志とか主体性といったものを超えた見えない力がそこに作用しているのではないかというようにさえ思われるのです。

私の抱くこの実感があながち被害妄想でもないということが最近刊行された長谷正人著『悪循環の現象学』[長谷 1991]を読んでいてたいへんよくわかつてきました。そこではマートンの予言の自己成就と自己破壊についての理論、フランクルの神経症の二類型論、ベイトソンのダブルバインドの理論、ワツラウィックの家族療法などのすぐれた成果を取り入れながら「意図せざる結果」の問題が展開されています。これは今の私にとってたいへん興味深く刺激的な著作です。

話を戻しますが、そういうディスコミュニ

ケーションの問題に吉田先生ならばどのように答えるのだろうかという関心から、今回は先生のお仕事を読ませていただきました。90年に刊行の二著作は、吉田先生のこれまでして来られたお仕事を集大成したものであり、年代的にみてかなり古い論文も収められていますが、今日の御報告でも先生御自身がしきりと話題にしておられた「情報科学の構想」という1967年に書かれた論文も収録されています。そこをみますと「社会的ディスコミュニケーションの諸類型」という小見出しがついたところがありまして、コミュニケーションの過程について、発信過程、送信過程、受信過程それぞれに問題ありのケースが分類されています〔吉田 1990 a: 268-270〕。

## (2) 関係の病としての分裂病

なるほど確かにこのように三つの過程に分けて問題をみていくことによってディスコミュニケーションの原因を探っていくのも一つの有効な方法であるとは思います。また実際、我々は日常そういう形でよく問題を処理しています。しかし、長谷さんの著作やベイトソンの仕事を知ってしまってから後では、このように要素別に原因をみていくやり方によって、人間のディスコミュニケーションという現象を本当に包括的に論じられるのだろうかという疑問が湧いて参ります。例えば、関係の病としての分裂病の場合、原因是部分要素ではなく、或る関係性、或いはシステムそのものにあるということがあります。これについて、ベイトソンのダブルバインドの理論を説明する際によく挙げられる分裂病の息子とそれを見舞う母親のディスコミュニケーションの例を使ってちょっと説明してみます。

強度の分裂症の発作からかなり回復した青年の病室に母親が見舞いにやってきた。青年は喜んで母親の肩を抱いたが、彼女が身

体をこわばらせたのに気づいてすぐに腕を引っ込んだ。すると母親は「もう私を愛していないの？」と尋ね、息子が顔を赤らめると「まごつくことはないわ。自分の気持ちを恐れていなければダメよ」と言ったのである。青年はその後自分の母親と数秒しか一緒にいることができず、彼女が帰ると病院の清掃夫に襲いかかったため、冷水浴を施されることになった。

こういう状況です。言葉によるメッセージ内容とそれを伝えるときに身体の発するメタメッセージがまるで逆であると言う問題がここにはあります。つまりこのときの母親の息子への対応とはいわば「私を愛さずに愛しなさい」というようなもので、矛盾した二つのメッセージに直面して息子は分裂病が悪化してしまったということです。或る見方をすれば、この母親は息子が近寄り、抱きしめようとしたとき、自分の方で身体で拒否しておきながら「もう私を愛していないの？」なんて言っているわけですから、責任を息子に転嫁している母親が悪いということになるわけです。多分、吉田先生流の分類では、メッセージの送り手としての母親と受け手としての息子という図式になってくると思うのですが、そのとき二つのことが問題になります。息子は専らメッセージの受け手であり、母親は送り手であるだけだろうかということが一つ、そういうふうに要素を見ていく方法で十分なのかどうかということがもう一つです。

長谷さんの著作からの孫引きですが、精神医学者のレインがベイトソンのこの事例に言及していて「(息子が母親に接近したときの)表情や歩き方の微妙なニュアンスによって、彼女に接近することに対する彼の恐れを母親につぎ込み、そのため彼女が硬直した」と言っています。これはどちらに最初の原因があったかという議論はあまり意味がない、互いにパラドキシカルな行動を誘発し合う循環

運動を引き起こし、その運動を永続化させているコミュニケーションのパタンこそ問題とすべきだという指摘です。このディスコミュニケーションの関係性は一度始まると悪循環的に自身を再生産し続けることになる。今の場合だと、分裂病が悪化したとなるとますます母親は息子にぎこちなく接するようになります、そうすると息子はどう母親と接していいかとまどい、ますます病気がひどくなるというわけです。

それから、この矛盾を論理的に指摘することが息子にはできないと言う問題があります。「お母さん、あなたの言動は矛盾している。僕の愛情を拒否しているのはお母さんの方だよ」と言えればいいのですが、そうできないところに問題の本質があるとも言える。つまり、他人の関係ではなく、母子という濃密な情緒的結びつきのある関係であるからこそ、悪循環から抜けられなくなってしまうという問題がそこにはあるわけです。ペイトソンは分裂病患者を生んだ家庭環境において、患者となる人は発病以前の幼児期から、家庭内の自分より強者の立場にある者から様々な二重拘束を受けてきたと指摘しています。相互に矛盾する二つのメッセージを押しつけられた犠牲者がたまたま患者になるということです。或る種の家族関係そのものにディスコミュニケーションの源泉があるのであって、母親とか息子という要素そのものが原因ではないし、従ってまたそういう形で原因を特定して治療しようとしてもうまくいかないわけです。うまくいかないどころか、直そうすればするほど悪化することにもなります。

### (3) 近代家族ゆえのディスコミュニケーション

口から出た言葉とは全く裏腹に母親の身体がこわばっているということは、彼女の方で何らかの理由で息子に対して不安感や敵意を抱いており、また同時にそうした感情を子供

に対して抱く自分は正しくないのだという意識をも抱いていることを示しているのだとペイトソンは考えているようです。「母親らしく」ふるまわねばならないという規範が過剰であるために、かえって行動がぎこちなくなり、関係をおかしくしてしまうというのは、社会システムの中で情緒過剰を期待された近代家族というものの歴史的位置づけという、アリエスによる『〈子供〉の誕生』などの社会史研究以降、脚光を浴びてきた問題と関わるものなのかもしれません。親密な関係の形成を強制されている領域として近代家族とは歴史的に特異な人間集団であり、そのことゆえに固有のディスコミュニケーションが起きているとも考えられます。この情緒現象の歴史性というのはかなり重要な点でしょう。

ダブルバインドについて言うと、類似したケースはごく日常的な家族関係の中でよくみられます。例えば「あなたはもっと自発的になりなさい」と妻がぐずの夫に対して言う場合、夫は自発的になることは論理的に不可能ですね。「自発的になる」ことそれ自体が妻が言っていることに従うことになるわけですから。自発的になることもならないこともできないとなれば、精神的におかしくなる以外に途はないのです。パブロフの条件反射についての有名な犬の実験がありますが、パブロフは犬に強制的に神経症を起こさせるというひどい実験もやっていまして、円のときエサを与える、楕円のときはやらないことにして、楕円を次第に円に近づけていく。そうすると犬はついにそれが楕円なのか円なのか識別不可能なところに追い込まれ段々とおかしな行動をみせ始めます。つまり、実験室の中で狂ったように吠え続ける、実験者にかみつく、落ちつかなくなる、食欲がなくなる、ついに昏睡状態に陥るなど神経症的行動を示すようになるわけです。

一方で識別しなければならないということになっていて、しかし他方では現実に識別不

能な問題を与えられるという二重拘束状況の前で犬は狂ってしまうのですが、人間も同じ状況におかれたら多分同じようになるのでしょうか。そして、近代社会システムというのは人間をこの犬と同じ状況におきやすい条件を備えているのではないかとも考えられます。身体と言語がまるで分離してしまっている母親の姿というのはその意味で近代的人間関係のぎこちなさを象徴するものであると思われます。

ともあれ、先程の分裂病の息子と母親の場合、濃密で容易に抜けられぬ情緒関係、自己を再生産し続けるコミュニケーションパタンの存在というのが肝心な点で、そういう視角から関係の病としての分裂病、或いはディスコミュニケーションをシステムティックに捉えていくやり方の方が、送信過程に問題あり、受信過程に問題ありとやしていくやり方よりも説得力を持っているように私には思われます。吉田先生のディスコミュニケーション論の場合も「失語症」への言及はみられる〔吉田 1990 a : 268〕のですが、あまり展開されてはおりませんし、「分裂病」は触れてありませんね。要するに吉田先生のディスコミュニケーション論では、今みてきたような関係の病という視点からの把握が、残念ながら甚だ不十分と思われるのです。確かに先生のこの論文はベイトソンの仕事がまだあまり注目されていない 1967 年に書かれたのですが、それを 1990 年に出版する書物にそのまま再録するのですから、そのことに関する責任はやはり著者である先生が負うものだと考えるのが普通です。

### 3. 「意図せざる結果」論への着目の必要性と可能性

#### (1) 過剰な形式志向の意味するもの

そんなに古い話を持ち出すな、という感想を抱かれる方もいるかもしれません、私は

これは単なる見落としというような性質の問題ではなく、もっと根が深いところからきている問題であるような気が致します。つまり、基本的な発想のスタイルがそもそもベイトソンやレインの場合と、吉田先生とでは違うのではないかということです。というより、皮肉なことですが、おそらくは、要素別に見ていくという吉田先生的分類作業によっては解明できない点にこそディスコミュニケーション問題の本質があるのではという気がするのです。

そしてさらに言えば吉田先生的方法を「正しい」とみなしてきた従来の社会科学の在り方にに対する根本的な批判を含んでいるがゆえに、我々はダブルバインドや悪循環の問題に眼を向けなければならないということになって参ります。長谷さんが悪循環という現象に着目するのは、それを過剰に発生させてしまう「近代の不器用さ」を問題にするためであり、そうした不器用さをたっぷり備えた従来の社会科学の方法を反省せねばとの趣旨であろうと私は受け止めています。

そこで次に検討してみたいのは、社会進化論者を自認しておられる吉田先生の理論社会学の体系の総体を貫く根本的発想が、もしかすると先生の中に内面化された近代主義によって色濃く染まったものではないかという問題です。もしそのようなことが明らかになつたならば、そして近代主義の方法的限界や落とし穴、或いはその危険な一面などが明らかになつたならば、これから我々が構想すべき社会情報学は今、吉田先生がお話しになつたものとはだいぶ様相の異なつたものになるのかもしれないのです。

例えば、マラソンで走っているランナーを街頭に立って見ているのとテレビの画面を通して見ているのとでどちらが「本当の現実」かと問うてもあまり意味がないという趣旨のことを話しておられましたが、この問いの立て方自体が見ている人中心の発想でして、そ

こでは実際に走っているランナーの苦しさという現実は忘れられがちとも考えられるのです。まなざすことを特権待遇にしたのは近代的主体の特異な構成と大いに関係のあるものかもしれません。私自身も含めて、自らの内に湧き起ころってくる「まなざしたい」という意志それ自体がもしかすると歴史的に作られたものかもしれない、それ自体が一つの「権力への意志」の現れかもしれないということについて、我々は批判的に捉え直さねばならないでしょう。また、ついでに言及しておくなら、まなざす立場から構想される社会情報学では危険なところがあることにも我々は注意深くなければなりません。

それはさておき、吉田先生のお仕事で私が常々感心するのは、現象の飽くことなき分類という知的営為を支える情熱です。あらゆることについてきちんと分類しておられます。或る種の強迫観念にとりつかれているのではないかという印象さえ受けますが、ここまで分類することにどういう意味があるのかなどという素朴な疑問を私は時々持ちます。分類それ自体が自己目的化してしまおうとそれが理論社会学というものなのだと或いは先生は仰るかもしれません、可能ではあっても必ずしも重要（必要）とは思えぬ分類作業が時折あるのをみるにつけ——私には今取り上げた「社会的ディスコミュニケーションの諸類型」の部分などはその一典型例と思われます——吉田先生の方法を支えるエーストスを知識社会学的に解説したくなる誘惑にかられるのです。

もちろん、分類・整理する行為一般は誰しも否定しませんが、有意義な理論構築のためには、やや過剰なまでの形式志向それ自体がはらむ問題点を指摘せねばならぬ場合があるということを私は言いたいのです。この問題というのは実は、目下、かなりもてはやされているハバーマスの社会理論に対して私の抱く不満感とかなり共通しています。ハバーマ

スというのもきちんと整理し、図式化して提示するのが好きな人として、例えば、システム統合に社会統合を形式的に対置するところがあります。しかし、これに対して山之内靖さんが最近の論文で「ハバーマスにおける社会統合とは、価値間のぬきさしならぬ対抗関係という文化の運命的歴史性をおき忘れた脱歴史的世界の別名」[山之内 1991 上: 22]であり、「形式と内容の安易な切断は、社会科学の中に状況の持つ具体性から遊離した非歴史的思考をすべりこませる」[山之内 1991 下: 102]というたいへん手厳しい批判を加えています。また山之内さんがこの論文で引用している法哲学の村上淳一さんも同様の趣旨の指摘をハバーマスに対して行っています[村上 1990: 29-30]。

ハバーマスと一緒にされても困ると或いは吉田先生は仰るかもしれません、要するに我々は知的遊戯や超歴史的形而上学ではなく、現実の歴史の動きとか人間の生活を説明する力を持った社会学理論をこそ必要としているということです。とりわけディスコミュニケーションという問題の場合、これは切実です。要素還元的分類よりも動的関係性そのものを視野に入れた悪循環論などシステムティックな方法の方に今の私は魅惑されます。この話には後で再び戻りますが、その前に最近、興味深い吉田先生批判を聞いたのでそれに触れておきます。

## (2) 吉田社会システム論とリアルな社会変動

実はこの6月の関東社会学会に行きました——私は関東地区を離れた今もまだこの学会の会員なのですが——「あらためて自己組織性を問う」というテーマ部会での吉田先生の御報告「〈情報—資源論的自己組織パラダイム〉の諸概念と諸命題」とそれへのコメントの模様を聴いて参りました。特に面白かったのは、吉田先生のゼミの出身という宮台さんのコメントでした。そのコメント資料

[宮台 1991 b] というのがあります、少しそこから引用してみます。

吉田システム理論は、システム変動を、人間の認識や志向や意識に縛りつけすぎている。(中略)システムはいかなる志向化対象化をも経由しないで、変動することがあり得る。というよりも、殆どすべての歴史的マクロ変動がそうしたものである。志向優位の変動論が妥当するのは、設計図に基づく組織改革や、ごく稀に成功した社会計画だけだろう。その意味では、「部分領域にしか妥当しない」といっていい。だとすれば、社会変動の一般理論は「潜在性」——行為者たちが志向せざる変動——をこそ中心に据えたものであるべきではないのか？

このほかにも、オートポイエシス概念についての誤解（オートポイエシス概念と階層的制御概念は水と油）、階層的制御システムと定常的循環システムの混同、ルーマンのミスリーディングなどの諸点が指摘されているのですが、宮台さんの吉田先生批判の主要な論旨は要するに吉田社会システム論では、変動を人間の認識や志向や意識に縛りつけすぎていてリアルさに欠けるということのようです。この批判を聴いて改めて思ったのですが、確かに吉田先生のお仕事では「主体性」ということに異様なまでの価値が置かれているような気が致します。しかし、我々は日常において、本当にそんなに主体的であるのか、志向したことが変動にその通りに結びついているのかと疑ってみた方がいいのではないかでしょうか。

吉田先生の「主体性」愛好が、個人というものに特別の価値をおく近代主義が吉田先生の脳裏に頑強に焼きついているために、生じている現象であるのかないのかよくわかりませんが、物理現象、生命現象、社会現象と説明するときの三段階論というのに既にこの志

向性がよく現れているのではないかと思います。現に今日のお話でも生命現象以降とそれ以前との差異を力説しておられましたし、生命現象の中でも特に人間のみに固有の「主体性」ということを強調しておられました。また、所有論や疎外論についてみましても制御能主体の資源処理——疎外とはそれがどこかで失敗している状態——という形でいろいろな事態を包括的に整理していく論じ方が基本になっているわけです。

その場合、主体が対象をコントロールするのは無前提によることだし、できる限りそうなるのが望ましいことだという価値観が理論の構成に知らず知らずのうちに投影されていることはやはり注意すべきでしょう。もちろん、私自身も主体的でありたいと願う人間の一人であることを否定しないのですが、吉田先生の場合、まなざす権利を持つ主体なるもの成立の経緯について歴史的に反省し直してみるという態度がどうも希薄ではないかという点が気がかりです。先に挙げた過剰なまでの形式志向についてもこの脈絡で検討する余地が出てくると思います。そこにはやはり「権力への意志」の兆候は伺われると思います。私はここにヘーゲル主義の濃厚な臭いを嗅ぎつけてしまします。批判的理性を重んずるアドルノたちに言わせると精神の能動性を価値あるものとみなす人間至上主義的なこの欲張りな観念論哲学こそよくも悪くも西欧近代思想の精華というべき形而上学であり、啓蒙という名の野蛮であるということになります。またニーチェならば、こうした「主体性」への固執の中に弱者の「救済願望」をみてとるかもしれません。

ちなみに、権力というものをフーコーのように「関係の中に網の目のように張られた」ものとして捉える見方の登場によって権力論はすっかり様相を変え、権力作用論とでも呼ぶべきものになりました。ニーチェの大きいなる影響下にあると思われるフーコーの「牧

人＝司祭型権力」という観点からすると「権力を行使する主体」なるものがどこかに存在するという発想自体に疑問が投げかけられます。これは社会科学にとってたいへん大きな発想の転換です。吉田先生の「主体選択」という概念はフーコーによって批判される典型的な近代主義の例ではないのでしょうか。

なお、吉田先生が自分の発想と共通しているとして、好んで引き合いに出される芝田さんや梯さんによるマルクス主義の立場からの所説というのも何のことはない、マルクスの中のヘーゲル的要素を強調するからそうなってしまうというだけのこととして、実は吉田先生の立場と「正統派」マルクス主義の立場との同質性が立証されたにすぎません。私からみると、だからどちらもヘーゲル主義に汚染された思想であってダメだとなります。精神の能動性の手放しでの贊美という名の、アリストテレスの言う「質料なき形相」を吉田先生は無自覚のうちに取り込んで、それを基礎にして社会理論を構築していらっしゃるかもしれません。

我々は自分自身が歴史的制約を受けながら思考している存在だということをもっと知る必要があるし、そのことへの畏怖の念を忘れてはならないでしょう。私の感触ではヘーゲル好きの人というのはその認識が弱くなっていて、例えば普遍性を備えているはずの「科学」それ自体さえ、時として一種の権力作用の場になりうることに無自覚すぎるよう私は思います。そのことから言っても「可能ではあっても必要性のないもの」ということに鋭敏な脱ヘーゲル主義の社会学者がもっと増えなければならないだろうと思います。

### (3) 病理としての家族ホメオスタシス

さて、もし宮台さんの批判が妥当だとすると吉田社会システム論は本当に「包括的」といえるかどうか甚だ怪しくなるわけです。たった今、リプライとしてなさったお話では、

この8月になって先生は「相対一次の自己組織性」「相対二次の自己組織性」なる概念を新たに作られたそうですが、私の感触ではやはり苦しいのではないかと思われます。というのも伺った限りでは、概念を変えてみても、内容的にみるとやはり「主体性」に依存した発想を抜けていないように見受けられるからです。生命以降の自己組織性の基礎として「主体選択」を位置づけるところから出発する方法は変更していませんし、「意図せざる結果」生じたことまで「事後主体選択」と呼ばうとしているわけですから。そのやり方で果たしてリアルな社会変動を扱うことができるのかどうか。今度はそのことについて吉田先生の社会変動論の中核的部分である「四フェーズ論」を素材にして検討してみたいと思います。その前に議論がかみあうようにする手続きが必要だと思うのですが、私はまずリアルな社会変動過程の把握には潜在性論、すなわち「意図せざる結果」論が不可欠であるというように宮台さんの問題提起を読み変えてみます。

「意図せざる結果」の一つとして予言の自己成就と予言の自己破壊というマートンの着目した現象があります。予言したことそれ自体が現実の一部となって予言そのものを実現する、或いは逆に覆してしまうという現象です。前者の例として、倒産しそうとのデマによって起きる銀行の取り付け騒ぎによって本当に倒産が起きてしまうケースを挙げることができますし、後者の例としては、官庁の農産物生産量の予測が予測としてアナウンスされたこと自体によって値崩れを恐れた生産者の生産自粛を促し、予測が結果的に裏切られることがあります。この場合、志向それ自体によって志向とは逆の結果が起きていています。ウェーバーのプロテスタンティズムの禁欲的倫理が結果的に資本主義を生んだという話も「意図せざる結果」の一例でしょう。

次にポジティヴフィードバックとネガティヴフィードバックという概念についても説明

しておきたいと思います。ポジティヴフィードバックは逸脱増幅的相互因果過程という日本語に訳されることもあるのですが、例えば、ハウリングという物理現象があります。ちょっとしたノイズをマイクが拾ってしまうとものすごく大きな音に拡張されて出てくるという現象です。また道路にちょっとした窪みができるとそれがどんどん大きくなっていくというのも同じメカニズムです。偶発的な発端の始動を雪だるま式に拡大してしまうような過程が存在しているということです。これに対してネガティヴフィードバックというのは、逸脱解消的相互因果過程という日本語になります。例えば、サーモスタットのように一定以上に大きな逸脱が発生しないように作られたシステムの場合、これが起きます。人間の相互行為においてもこれと同じように抜け出たくても抜け出れないような状態におかれていることが結構あると思われます。

長谷さんのお仕事〔長谷 1989, 1991〕にある家族ホメオスタシスの一例を取り上げてみましょう。葛藤のある夫婦と喘息持ちの子供のいる或る家族の場合、子供の発作の介助をするときだけ夫婦関係の調和が得られるというのです。この夫婦は「早く治って欲しい」と言い、現に懸命の看護をするが、言語外のメッセージで子供の喘息を誘発させてしまっている。子供の方も夫婦喧嘩が始まると発病する。だからこの家族はネガティヴフィードバックの回路にはまっていて、悪循環が続く。このパターンからなかなか抜けられず、喘息を直そうとすればするほど喘息は直らなくなる。そこで例えばもっと喘息をひどくなるようにし向けてみると逆説的なことをしてこの悪循環を断ち切ろうとする試みとして家族療法というのがあります。この意表をついた治療方法はたいへん面白いし、また我々がディスコミュニケーションとして現れる病理的な人間関係を変えていく上で参考すべき点の多いものだと思います。

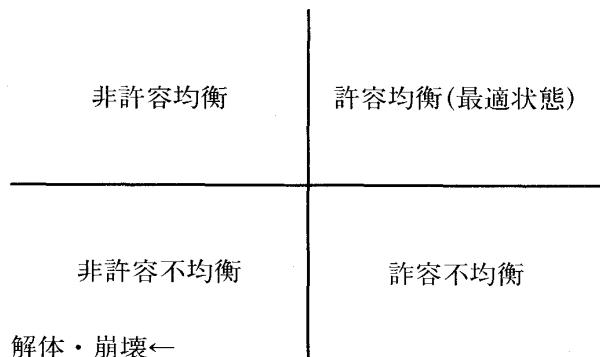
しかし、ここでは吉田社会システム論の検討ということが課題ですから、それに応えるべく、この家族ホメオスタシスのケースを論理的にみていくことにしたいと思います。ダブルバインドに着目する長谷さんのシステム論で私に面白いのは「ポジティヴフィードバックに巻き込まれた人々が苦しまなければならぬのはそのメカニズムによってシステムの分裂が生成してくれずに逆にネガティヴフィードバックが働くことによってシステムが「変化への動き」をその内部に孕んだまま安定してしまうこと」〔長谷 1989:67〕「ダブルバインド的関係は、それを包み込むより大きなシステムの秩序によって固定化されてしまうのだが、それ自体がネガティヴフィードバックによって固定されたシステムであると考えることもできる」〔長谷 1989:68〕と述べている点です。安定しているから好ましいとは見ずに、構成員が身動きがとれなくなつて苦しむ種類の病理的安定もあるというように重層的に捉える観点がここには存在します。ちなみに、この観点はシステム論にとって画期的な意味を持つマゴロウ・マルヤマの論文——これは吉田先生の愛好するウィーナー的システム論への痛烈な批判なのですが——にもみられます〔Maruyama 1963〕。この論文はウィーナーのネガティヴフィードバック礼讃への批判がその執筆動機のようです。

#### (4) 吉田社会システム論の均衡論的性格

今挙げた喘息の子のいる家族のおかれたホメオスタシス的状態というものを私の言葉で言い直しますと、何らかの変動が必要であるのに構成員たちの「主体性」を超えた安定性があるためにそれが起きえない状態となります。「主体的」にふるまおうとすればするほど泥沼にはまってしまうような状態がここにはあるわけです。こういうダブルバインドのケースを必要性と可能性ということで言う

と、必要性はあるのに可能性は閉ざされているということになるでしょう。「可能ではあっても必要性のないもの」を先程は言いましたが、これはそれとちょうど対極的な状態です。

では、もしういうダブルバインド状況にあたる言及を敢えて吉田社会システム論の中にみいだそうとするなら、どううことになるだろうかと考えまして吉田先生の「社会体系の一般変動理論」という論文〔吉田 1990 b〕をみてみます。この論文のユニークな点を一つ挙げるとすればやはり変動の原因と条件を区別し、許容軸と均衡軸の二つをたてて「四つの基本状相」を設けている点になるでしょう。それを実際に図にしてみると次のようになります。



この状相間の動きが内生的社會変動となるわけですが、論文では後の方で「状相循環の三つの基本型」として①非許容不均衡—非許容均衡—非許容不均衡、②非許容不均衡—許容不均衡—非許容不均衡、③非許容不均衡—許容均衡—非許容不均衡が挙げられています。

物理学と生物科学と社会科学、つまり全自然科学を貫徹する均衡原理（可能性）だけでなく、生物科学と社会科学に固有の許容原理（必要性）の存在を把握することで「正統派機能主義によって理論化されえなかった」問題に踏み込むことができたというわけです。許容原理に対応する要件論的アプローチ、つまり或る要件の充足に関わる正負の機能をあ

れこれとみていくアプローチの導入により、生命以降のシステムに特有の現象に言及できるようになったというところまではよろしいのですが、問題はその先にあるように思います。おそらくタブルバインド状況は「四つの基本状相」の中の「非許容均衡」状態（変動が必要だが、不可能な定常状態）の特殊ケースが該当することになるでしょう。確かにその現象についての指摘はあるのですが、しかし、それを二重の拘束を受けた特異なホメオスタシスとは捉えていないのではないか、またそのことの持つ重みにあまり関心が向いていないのではないかということが私には気になります。

多くの論者がアナロジカルに依拠してきた有機体の〈ホメオスタシス〉は、我々の枠組で言えば、許容均衡、一層厳密には〈安定許容均衡〉に属している。変動の原因のみあって条件のない〈非許容均衡〉は抑圧状態であり、行き詰まり状態であり、不満だけれども精一杯の状態である。〔吉田 1990 b: 188〕

この非許容均衡の「行き詰まり状態」も「選好—許容水準の「上方調整」および／または与件設定の「縮小調整」によって非許容不均衡へ再移行する」〔吉田 1990 b: 198〕というのですが、ダブルバインドの場合、そう簡単に移行しないで固定しているところにやっかいさがあると思われます。その事実が吉田社会システム論では十分捉えられていないのではないかでしょうか。これはネガティヴファイードバック礼讃のウィーナーをそのまま継承したための欠陥であるのかもしれません。つまり、ウィーナーと吉田先生は共に、ホメオスタシスをシステムの秩序維持のために好ましいものとする発想を根強く持っているためにその理論構成においてタブルバインドの問題が原理的に視野に入らなくなっていると思わ

れます。さらに吉田先生の場合、近代個人主義的な「主体性」概念への固執がこれに加わって参ります。これはなかなか根の深い問題です。

結論として吉田社会システム論とは生命以降の自然を対象とする生物科学と社会科学に固有の許容原理（必要性）という視点を導入した点で従来の正統派機能主義を凌駕する部分を備えているとはいえ、ホメオスタシスの考察に悪循環の視点が欠如している点にみられるように、導入の仕方がまだ不十分であり、ダブルバインド論などに比べるとやはり一種の均衡論的性格を濃厚に有したシステム論の域を出ないものとみることができるのでないかと私は考えます。

なお、可能ではあるが、さほど重要ではない細かい分類への志向性の中にも均衡論的性格が見え隠れしていると言ったら言いすぎでしょうか。しかし、少なくともこの性格は「可能であっても必要性のないもの」を反省的に捉え直す鋭敏さを欠落させた社会進化論と結びつきやすいということは指摘できるでしょう。仮に均衡論のレベルでパレート最適が得られたとしても、そのことと人間生活にとっての要件充足とは全く別問題であることは吉田先生も御承知の通りです。そして社会学者は後者の問題に鋭敏であり続けることによって社会学者たりうるのだと私は考えます。また、このこととの関連で今田さんの自省的機能主義論[今田 1986 など]への低い評価[吉田 1990 b: 287]の妥当性も問われてくると思います。私には機能や構造を超えたポスト・モダン社会の構築という関心から「差異化—ゆらぎ—リフレクション—意味の編集」という過程に着目するこの今田さんのシステム論の試みはたいへん興味深いものに思われます。

それにしても均衡原理（可能性）ならぬ許容原理（必要性）ということの内実に立ち入って行くに際しては近代的な個人主義的人間観

から自由なトータルな人間論がどうしても必要になってきます。自己言及性、潜在性、ダブルバインド、悪循環、そして「意図せざる結果」などに積極的に言及しない限り、近代的な「主体性」を超える許容原理（必要性）に関わる問題を十分に取り入れた社会システム論や社会情報学の構築は難しいと思われます。

#### 4. 生活世界の深層としての身体性と受苦性

##### (1) 悪循環突破の可能性と身体の下層部分

吉田先生の社会システム論は、いろいろな現象がきちんと整理されており、一見するとたいへん包括的なようであるけれども、よくみると本当に包括的なのかどうか疑問に思われる点もあるということについて、主に「主体性」を超えた世界、システムの潜在性という問題を的確に捉えているのかという点から検討して参りました。それだけ批判するなら、代案を具体的に提示してみろとの声が聞こえてきそうです。本来なら潜在性、ダブルバインドなどに関する理論的成果を導入した社会システム論や社会情報学の可能性についての展望というような話をこれから展開しなければならないと私も思うのですが、残念ながらその準備はまだ十分ではありません。

しかし、何も言わないというのも寂しいので、最後にそのような方向性にとって手がかりになりそうなことを今まで述べてきたダブルバインドとか悪循環の他にいくつか提示してみたいと思います。一つは、安定をアブリオリに善とする均衡論的発想やオptyimisticな社会進化論への安易なもたれかかりの中にニーチェの言う「救済願望」が潜んでいはしないかと疑うことです。以前に「意図せざる結果」論の中で「不確実性」がどう扱われているかを考察した際に私はこの論点に甚だ不十分な形ではありますが、触れてみ

ました [井上 1989 a]。不確実な状況に耐える超人思想というニーチェとウェーバーに共通するモチーフについて再検討することは大いに現代的意義を有していると思います。この点についての山之内さんの一連のお仕事は [山之内 1986, 1988 aなど] は私にとってたいへん教えられるところの多いものです。

次に「可能であっても必要性のないもの」を識別する方法的基準について、近代的価値観から自由に考えてみる必要があるという点については「身体性の社会学」とでも言うべきものを構想しなければと考えています。先に話した分裂病の息子と母親のケースにしても、喘息の発作が続く子供と両親のケースにしても、家族関係がうまくいっていない事実が身体の現象として発現しているわけです。言葉のレベルの嘘を身体は受け入れないとみることもできるでしょう。また、我々の生活に本当に必要か否かということを生態系的視点から捉え直すためにも、身体の訴える声に耳を傾ける必要があります。これは一つ目として挙げたニーチェの思想ともつながってくる問題です。それは誤解されているような大衆蔑視の思想などではないのでして、近代知性主義に汚染されない民衆の知をニーチェは高貴なものとして信頼していました。生活世界の深層に触れる社会学の可能性はそのような信頼によってはじめて開けてくると思われます。

生まれて、生きて、人と交わり、年老いてやがて死んでいくという生物としての絶対的過程を人間は必ず辿るのであるという原点に我々は立ち返る必要があるでしょう。言葉より遙かに雄弁な身体性に着目するとは人間存在の本源的な受苦性に着目することもあるのです。この点、我々は「水の駅」という言葉の全くない演劇を創った太田省吾さんの演劇論 [太田 1980] から多くを学びとれます。「水の駅」は私が最高に感激した作品でした。フォイエルバッハ哲学にも我々は「水の駅」

と同じモチーフが感じとれます。彼の唯物論哲学のすごいのは、有限で部分的な存在という意味での身体性=受苦性を直視する地点から「頭で逆立ちした」ヘーゲルの転倒を真っ向から批判した点です。

それから吉田先生は論文の中で「非許容均衡」のことを「行き詰まり状態」と表現されていましたが、この「行き詰まり状態」なり悪循環なりから脱する方途、つまり病理的ホメオスタシスから脱する方途というのがやはり、身体性と大いに関わるものだと思います。それも記号として扱われる対象になりがちな皮膚の臨界面として外界と区分される表層的身体ではなくて、どうやら「主体性」の及ばぬことの多い身体の下層部分と深く関わっているらしいのです。このことに関しては例えば、「笑い」に着目した民俗学の飯島吉晴さんのお仕事 [飯島 1985] が私には示唆深く思われます。社会学者で身体の下層領域に目を向けている人は殆どいないのですが、社会体系の深層に棹をさすことを試み、「突破」の契机の一つとして「禅」を取り挙げる青井和夫さんのお仕事 [青井 1987] は吉田社会システム論には乏しい「非許容均衡」状態に関する変動の可能性に言及したものといえましょう。

なお、この領域については私も以前に「内蔵感覚」「身体の(不)確実性」をキーワードに若干の考察を試みたことがあります [井上 1986, 1989 b]。昨日、近感覚と遠感覚——千谷さんの書物を後で調べてみたら正確には、近観得と遠観得となっていました——の概念規定という吉田先生からみると些細な点について質問したのは、生命記憶という35億年の歴史を持つ身体の古層と結びつく内蔵感覚の問題が頭にあったからです。クラーゲスと千谷さんの言う遠観得の世界は言葉になりにくいし、近代知性主義が過剰な状況では表面化することが少ないので、生命以降の「主体性」の歴史を貫徹するという意味で人間論

において本質的なものです。

吉田先生はそれまでのしがらみや権威にこだわらぬ自由な創造作業のために何でも名前を変更することができるし、理論的には積極的にそうした方が好ましいという趣旨から「ガチャランコ」云々というお話をなさったのだと私は受け止めました。それはよくわかるのですが、歴史の重みを無視してかまわぬという発想の中に意外な落とし穴があるのかもしれません。特に我々自身の内なる自然としての生命記憶の歴史について考えるとき、そう思います。

## (2) 生活世界の深層とシステム論

我々が、生身の身体で感じ取る生活世界の深層の魅力とシステム論というのはうまくないじむのだろうかという疑問も出てくるかと思います。ハバーマスなどのようにシステムと生活世界を明確に二分する社会理論がもてはやされている現状では無理からぬことです。しかし、システム論にはいろいろな可能性があるし、また生活世界の深層にシステムティックに迫ることが必要な状況に社会が変わりつつあることもおさえておくべきだと思います。情報社会化とはシステム社会への移行でもあるとの観点に基づき、どこかに確固たる構造があることを前提としてきた従来の社会科学の方法を根本的に改める必要があることを最近の論文で山之内さんが説いています[山之内 1991 上・下]。この論文の後半は、メルッチというイタリアの社会学者の仕事の紹介になっているのですが、ルーマンとハバーマスに共通する限界を乗り越える身体論を提示しているメルッチの社会運動論は私にとってたいへん示唆深いものです。最後にそのことに少々触れておきましょう。

我々は、ルーマンとともに「社会進化は社会的関連を人間に関係づけることに意味があった状況を超えてしまった」ことを認め、社会科学の課題を「いかにして社会秩序は可

能か?」(ホップス的秩序問題)に切り換えねばならない状況であることを認めなければならぬようです。「ルーマンにとっては、もはや自己反省的な理性的アイデンティティは社会科学の問題たりえない。それに代わって問題とすべきは、部分システムが規範問題との関わりなしにもつて『偶然性克服的学習プロセス』なのである」[山之内 1991 上: 20] というわけです。しかし、その上で「システムの自己維持的で自己言及的な進化は、果たして、内部化不能の絶対的外部性という壁を持たないのであろうか」[山之内 1991 上: 10] と問うことも必要なのです。社会進化論者は知らず知らずのうちにヘーゲル主義に汚染されており、フォイエルバッハの直視した生命としての絶対的過程の存在を忘却しがちです。この山之内さんの発言はこれまでルーマンにとびついてきた人々が見落してきた点の指摘としてたいへん重要なものだと私には思われます。

「ルーマン・ハバーマス論争を超えてメルッチへ」と山之内さんは述べています。そのメルッチは、言語によるコミュニケーションを重視するハバーマスとは異なり、前言語的領域としての身体性にメスを入れる社会理論を開拓しています [Melucci 1989]。「神ないし精神に対して自然や身体を価値的に低い領域とみなし、さらには頽廃した領域とさえみなしてきた西欧近代の思考様式の終焉」[山之内 1991 下: 112] ということに我々はもっと自覚的にならなければならないでしょう。そして、私からみて魅力的なのは、ジレンマの克服ではなくて維持、不確実性や暫定性を引き受ける品位、状況倫理=責任倫理といった要素がメルッチの社会運動論の中には盛り込まれていることです。最後には個人の「主体性」という地点に返ってくるのだけれども、そこで問われるのは品位であり、厳しい責任倫理なわけで、ニーチェ・ウェーバー的問題が再度登場することになります。吉田先生の「主

体性」はこうした要素を含むのでしょうか。

人間である限り不可避につきまとう躊躇やジレンマや不確実性を避けずに、むしろ積極的に引き受けよというのです。このようなメルッチの理論構成はルーマンとハバーマスには乏しいものだったと思います。新しい社会システム論や「身体性の社会学」の必要性と可能性について展望する場合、我々はこうした要素を忘れてはならないと思います。また『ウェーバーとマルクス』の著者として名高いレーヴィットが、或る文章中のヴィーコの基礎命題にふれている部分で「人間は主観的な創造活動によって歴史を開拓するのだと思っている。だがその背後には何物かがいて

これを演奏している。上位にあってこれを操っているものがある。Überspielenしている何物かがある。その何物かは人間による自由な決定とか選択というものではありえず、むしろ運命の必然性というべきものである」という趣旨のことを述べているのですが、これはメルッチの言っていることと同じことを問題にしたものなのかもしれません。

最後はかなり断片的な話になってしましましたが、「試論」ということで暫定的にまとめてみたお話を御容赦下さい。以上でひとまず私の吉田報告へのコメントを終わらせていただきます。

本学の社会情報学部創設を記念しての「社会と情報についてのシンポジウム」が1991年8月に行われた(本誌前号参照)。社会学関係では吉田民人氏に「社会情報学の必要性と可能性」というタイトルで報告していただき、伊藤守氏と私がこの報告のコメントーターを担当した。私はその際に「吉田報告コメント資料」(前号90-91ページ)を用意したが、シンポジウム当日は時間的制約等の事由から残念ながらこの資料に則した話を十分に展開できなかった。そこで予定していたコメント内容を文章の形にまとめ直してみたのが本稿である。実のところシンポジウム当日の吉田報告は私が想定していたものと

はかなり異なっていたのだが、今回の文章化は単に時間があれば為されたであろうコメントの再現という以上に、吉田氏の構想する社会システム論に対するささやかな異議申立てという新たな意義をも有している。なお、シンポジウムを終えて以降に新たに気づいた点もつけ加えてある。幸いにして今回は紀要編集委員会の言う「原著論文」の形をとらぬ自由があるので、文体は敢えてコメントーターとして発言しているかのようなものにしてみた。この方が吉田氏批判としても、また「身体性の社会学の必要性と可能性」という表題にもふさわしいと私には思われる。

## 《文献》

- 青井和夫：社会学原理，サイエンス社（1987）
- 千谷七郎：遠近抄，勁草書房，（1978）
- 長谷正人：ダブルバインドへのシステム論的アプローチ，社会学評論，159：310—24（1989）
- ：悪循環の現象学，ハーベスト社，（1991）
- 飯島吉晴：笑いと異装，海鳴社，（1985）
- 今田高俊：自己組織性，創文社，（1986）
- ：モダンの脱構築，中央公論社，（1987）
- ：自己組織性と意味，社会学評論，158：137—151（1989）
- 井上芳保：内蔵感覚の復権と社会学の再生のために，社会と教育，2：61—95（1986）
- ：「意図せざる結果」論にみる不確実性の遭遇，理論と方法，4—1：117—130（1989 a）
- ：身体の（不）確実性と自己言及性，日本社会学会第62回大会報告，（1989 b）
- Maruyama.M : The Second Cybernetics : Deviation-Amplifying Mutual Causal Process. American Scientist 51 : 164—179 = 佐藤敬三訳「セカンド・サイバネティック」『現代思想』12—14 : 198—214 (1963)
- Melucci. A : Nomads of the Present. Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society, edited by John Kean and Mier, (1989)
- 宮台真司：行為と役割，今田・友枝編『社会学の基礎』（有斐閣）所収，（1991 a）
- ：吉田報告へのコメント，関東社会学会第39回大会コメント資料，（1991 b）
- 村上淳一：ドイツ現代法の基層，東京大学出版会，（1990）
- 太田省吾：裸形の劇場，而立書房，（1980）
- 山之内靖：社会科学の現在，未来社，（1986）
- ：歴史学的形象の呪力剥奪，思想，767：5—37（1988 a）
- ：コミュニケーション的行為は批判の基盤たりうるか，クリティック，13：7—21，（1988 b）
- ：システム社会の現代的位相（上・下），思想，804：4—35, 805：99—129, (1991)
- 吉田民人：自己組織性の情報科学，新曜社，（1990 a）
- ：情報と自己組織性の理論，東京大学出版会，（1990 b）
- ：〈情報—資源論的自己組織パラダイム〉の諸概念と諸命題，関東社会学会第39回大会報告，（1991）

1992年1月22日受付